

李益辺塞詩論

大橋 賢一

はじめに

中唐の李益は『唐国史補』巻下で、彼と同時代の文人、李益（字は君虞）の詩について次のように述べている。

李益詩名早著、有征人歌且行一篇、好事者画為図障。又有云、回楽峰前沙似雪、受降城外月如霜。不知何処吹蘆管、一夜征人尽望郷。天下亦唱為楽曲。

李益は詩名 早に著れ、「征人歌且行」の一篇（「送遼陽使還軍」詩の起句）有りて、好事者は画きて図障（ずゐ）を為る。又云う有り、「回楽 峰前 沙雪に似たり、受降 城外 月霜の如し。知らず何の処にか蘆管を吹くを、一夜征人尽く郷を望む」（「夜上受降城聞笛」詩）と云ふ。天下亦唱いて楽曲を為る。

当時の好事家が絵画の題材とし、楽人が楽曲の歌詞とした云々というこの二篇はいずれも戦地を詠じた、いわゆる辺塞詩である。また、劉禹錫が李益について「辺月空悲蘆管秋」（「辺月空しく悲しむ蘆管の秋」）（「和令孤相公言懷、寄河中楊少尹」）と詠じているのも、瞿蛻園氏が指摘しているように「夜上受降城聞笛」など彼の辺塞詩が意識されているに相違ない（註）。

唐代に限らず李益の辺塞詩が時を越えて人々に注目され続けていたことは、明人の選する『唐詩選』に収録された六首のうち四首が辺塞を歌ったものであることや、清の沈德潜が「君虞辺塞詩最佳」（君虞の辺塞詩は最も佳なり）（『唐詩別裁集』卷二）と述べ、李益の詩の中でもとりわけ辺塞を歌ったものが優れているという評語を充てていることなどからも窺える。李益には、友人不在を歌う「竹窗聞風寄苗發、司空曙」や、親類との偶然の再会と別れを歌った「喜見外弟又言別」などといった詩があり、これらもまた詩話の類に頻繁に取り上げられているけれども、やはり彼の文学の中で最も際立っているものは、沈德潜が端的に述べているように彼の詩の三分の一を占める五十首あまりの辺塞詩と思われる⁽³¹⁾。

沈德潜らは、恐らく李益の辺塞詩それ自体が内包する独特な風格を直感していたと思われるが、明清の詩話の一部はその風格に対し具体的な発言をしている。例えば胡應麟は「如夜上西城、從軍北征、受降、春夜聞笛諸篇、皆可与太白、龍標競爽、非中唐所得有也」（夜上西城、從軍北征、受降、春夜聞笛の諸篇の如きは、皆太白、龍標と爽を競うべく）、中唐の有り得る所に非ざるなり）（『詩藪』内篇、卷六）と述べ、中唐の詩人である李益の辺塞詩から李白や王昌齡のような盛唐の風格が感じられるという点において、それらを絶賛する。『詩藪』の記述に限らず、明清の詩話は、李益の辺塞詩が盛唐の詩風と類似していることを重視する傾向がある⁽³²⁾。なるほど「幸応辺書募、横戈会取名」（幸いに辺書の募りに応じ、戈を横たえて会^{ひな}ず名を取らん）（李益「赴邠寧留別」）といった勇ましい表現や、李肇が引用していた「夜上受降城聞笛」に見える、月光を浴びて故郷を思う兵士の描写などは李白や高適、或いは王昌齡などの辺塞詩を想起させるものである。盛唐の辺塞詩の特色と言われている勇武の気概や從軍の悲壯感の描出は、確かに李益のそれにも見て取れ、このような感情の発露がその風格を形成する重要な素因となっていることに異論はない。同時に李益の辺塞詩を感情表現という側面から見ると、盛唐の辺塞詩の枠から大きくはみ出しているとは思われず、その詩風を継承していることは見て取りやすいであろう。ただ、そうした中にも李益の個性や独自性が窺えるのであれば、盛唐の詩を継承するだけには止まらない、中唐という時代におけ

る、新たな辺塞詩の様相を見出すことができるであろう。小論ではこの点について少しでも明らかにしたいと考える。

李益の辺塞詩の独自性を考える上では、次に引用する清の張澍「李尚書詩集序」^{二〇}に見える発言が手掛かりになると思われる。

惟君虞以爽颯之氣、写征戍之情、覽関塞之勝、極辛苦之状、当朔風驅雁、荒月拜狐。抗声誦之、恍見士卒踏氷而韃瘞、介馬停秣而悲鳴。詎非才之所独至耶。

惟うに君虞は爽颯の氣^{二一}を以て、征戍の情を写し、関塞の勝を覽、辛苦の状を極め、朔風雁を驅り、荒月狐を拜するに当たると^{二二}。声を抗^あげて之を讀めば、恍として士卒の氷を踏みて韃瘞し、介馬 停まり 秣^まいて悲鳴するを見る。詎ぞ非才の独り至る所ならんや。

ここに「覽関塞之勝」「当朔風驅雁」と見えることからすると、張澍は李益が辺塞地域で目の当たりにしたことを詩に直叙していると認め、更にその描写に詩人としての非凡な才能を感じ取っている。この序文に続いて収録されている李益「従軍詩序」^{二三}に、約二十年にも及ぶ彼の従軍体験が記されていることからすると、恐らく張澍は李益のこうした閱歴を念頭においた上で、先のように発言したのでろう。また、近年の李益に関する論文を見ると、張澍のように李益の辺塞詩の独自性を従軍体験との関連から説明する傾向があり^{二四}、例えば范之麟『李益詩注』の「一序」には次のように見える。

這些以征人的眼睛和心情实地觀察・体験而写出的作品、極富生活实感、那些想当然的虚擬之作是難以企及的。

これら（李益の辺塞詩）は、出征兵士のまなざしと心情による實際の觀察、体験から写し出された作品であつて生活の实感に極めて富んでおり、思うがままに描く虚構・模擬の作品が（彼の詩の水準にまで）及ぶことはほとんど無理な

ことなのである。

唐代においては、李白、王之渙、王昌齡、李頎、常建などのように辺塞詩を残していても従軍の実体験を持たない詩人が一般的であつて、反対に李益のような従軍体験を持つ詩人は高適、岑参などに限られており、むしろ少数派と言える。従軍体験の無い詩人が辺塞を歌う際には、楽府題を用いるなどして創作することが普通であつた。楽府は既存の作品を意識しつつ創作されるのが一般的であることから考えると、范氏が言う「虚擬之作」とは、「出塞」「従軍行」といった楽府題による辺塞詩などが意識されているように思われる。

張澍や范氏などが指摘しているように、恐らく李益の従軍体験は、彼の辺塞詩の性格を決定づける重要な要素となつていようとする想像できる。しかし、彼らは李益の辺塞詩と従軍の実体験との関連性についての発言をしておらず、その関わりが具体的に明らかになつていゝるとは言い難い。従来、とりわけ盛唐の辺塞詩とは異なる印象を、彼らが李益の辺塞詩に感受した理由が、従軍体験に関わる表現にあるのだとすれば、両者の関連性について改めて作品に則しつつ具体的に検証していかなくてはならないだろう。

そのための具体的作業として、まず李益が従軍するに至る経緯を中心に彼の閲歴についてまとめこみ、続いて、主に盛唐詩人の辺塞詩との対比を通して、従来の特徴を継承する李益の辺塞詩の側面を押さえつつ、その独自性的一端を解明しようとするのが小論の目的である。

一 李益の従軍閲歴

李益の伝は新、旧両『唐書』の卷二百三と卷百三十七にそれぞれ立てられており、両書の記述には大きな異同はない。李益の貫籍について両『唐書』は、隴西成紀を貫籍に持つ肅宗の時の宰相、李揆の族子と記すことで省略しているが、柳宗元は「李益、隴西姑臧人」（李益は、隴西姑臧の人なり）（「先君石表陰先友記」）と記している。李益自身は「從軍詩序」の末尾において「本其涼国、則世将之後、乃西州之遺民与」（本より其れ涼国なれば則ち世将の後、乃ち西州の遺民なるか）と述べ、隴西出身の漢代の將軍、李広の末裔であることを誇っているようである。以上の記述から推すと、成紀か姑臧かは定かではないが、隴西が貫籍であつたことは間違いない。

『旧唐書』李益伝は彼が初めに北方に赴任したことについて「益不得意、北游河朔」（益は意を得ずして、北のかた河朔に遊ぶ）と述べるに止まっているので、ここでは主として「從軍詩序」に基づき、彼の從軍の経緯と赴任先を示すこととする。

君虞長始八歳、燕戎乱華。出身二十年、三受末秩。從事十八載、五在兵間。故其為文、咸多軍旅之思。自建中初、故一府司空巡行朔野。迨貞元初、又忝今尚書之命、從此出上郡、五原、四五年、徃再從役。

君虞長じて始めて八歳、燕戎華を乱す。出身すること二十年、三たび末秩を受く。從事すること十八載、五たび兵間に在り。故に其の文を為るに、咸軍旅の思い多し。建中の初めより、故府司空と朔野に巡行す。貞元の初めに迨り、又今の尚書の命を忝なくし、此より上郡、五原に出づること四五年、徃再として從役す。

「燕戎」は天宝十四載（七五五）に反乱を起こし、国号を燕とした安祿山のことを指すであろうから、李益の生年はそこから逆算して天宝七載（七四八）と推定できる。大曆四年（七六九）、齊映が状元の時に進士に登第^二、二年後の大曆六年には諷諫主文科に及第している^三。その後は華州鄭県の県尉、主簿を歴任しており^四、両者の品階は從九品上、正九

品下である。中唐以降、藩鎮の辟召に応じ、後に朝廷に戻って台省の要官を得るといふ文人が増加しており、当時吏部の銓選によるよりもこうした経歴を踏む方が昇進の早道であったこと。とすれば、李益は建中（七八〇）～七八三）と改元されてまもなく、昇進が早まることを期待して藩鎮の辟召に応じたのかもしれない。

建中の初めに李益を辟召した「故府司空」が誰を指すのかについては諸説あるが、卞孝萱「李益年譜稿」が指摘するように、建中以前、檢校司空並びに朔方節度使などの官職に就いていた崔寧と考えるのが穏当であろう。『旧唐書』卷百十七、崔寧伝には、彼が関内道北部の夏州、すなわちホブチ及びムウス砂漠の広がるオルドス地方一帯を巡行していたことが記されている。とすれば「序」にいう「朔野」とはこの地域一帯のことを指しているよう。貞元（七八五～八〇四）年間の初めに巡行したという「上郡」「五原」は綏州、塩州に属する地であり、ムウス砂漠の南に位置している。「従軍詩序」には、このように建中初年から貞元初年までの李益の動向が示されている。

この後の事跡について『旧唐書』李益伝は「幽州劉濟辟為従事。……憲宗雅聞其名、自河北召還、用為秘書少監、集賢殿学士」（幽州の劉濟 辟して従事と為す。……憲宗 雅に其の名を聞き、河北より召還し、用いて秘書少監、集賢殿為す）と述べている。李益が幽州節度使劉濟の招きに応じて河北へと赴いたことは、韓愈の「送幽州李端公序」並びに韋處物「送李侍御益赴幽州幕」、王建「寄李益少監兼送張実游幽州」といった作品の題からも裏づけられる。「従軍詩序」によると、李益が幕職官として「朔野」で勤めていたのは遅くとも八〇〇年までであるから、河北に赴任したのはそれ以後のことであろう。また韓愈の「序」に、天寶十四載（七五五）の安祿山の乱から数えて六十年経たことを示す「国家失太平、於今六十年矣」（国家太平を失うこと今に於いて六十年）という記述が見え、これが元和九年（八一四）に書かれたものと考えられることからすると、李益は遅くとも八一四年までは幽州節度使劉濟の幕に仕えていたと推測できる。

以上の資料によれば、李益の従軍体験は、七八〇年頃から八〇〇年頃までの約二十年間に及ぶ関内道の北部から中部一帯

を巡行した時期と、それ以降、八一四年頃までの、幽州節度使劉済の幕職官を務めていた時期に大別できる。

二 李益の辺塞詩の地名と時代表現について

(一) 地名表現

現存する李益の辺塞を詠じた五十首あまりの詩を通覧してみると、河北及び関内道北部から中部に位置する地名（山名、水名なども含む）や、それよりもやや広い地域名が多用されていることに気がつく。それらは「弘雲堆」「破訥沙」「鶻鶻泉」「統漢」「回楽」「陽城」「黄堆」「石楼」「上郡」「西城」「六州」「五城」「朔方」（以上、関内道にある地名、地域名）、並びに「滹沱」「燕州」「桑乾」「薊水」（以上河北の地名）の十七に及んでいる。関内道の地名が多くを占めている理由は、この地域における李益の従軍期間が河北におけるよりも長期に亘っていたことなどによるだろうが、この問題はひとまず措く。以下、李益の辺塞詩における地名が作品の中でどのように機能しているのかということについて、いくつかの点から検証してみる。

1 地名と詩中の主人公との関係

まず李益「度破訥沙二首」（其二）を例とし、詩中の地名と主人公の関わりを踏まえた上で、ここにどのような（辺塞空間）が構築されているのかを考えてみたい（三〇）。

破訥沙頭雁正飛 破訥沙頭雁正に飛び

鶻鵝泉上戰初婦 鶻鵝泉上戦いて初めて婦る

平明日出東南地 平明日は出づ東南の地

滿磧寒光生鉄衣 滿磧の寒光鉄衣に生ず

「破訥沙」は普納沙ともいう。庫結沙の別名で、現在の内蒙古自治区のホブチ砂漠にあたる。『新唐書』地理志七下に「夏州北渡烏水、……四十八里度庫結沙、一曰普納沙」（夏州より北して烏水を渡る、……四十八里して庫結沙を度り、一に普納沙と曰う）とある。「鶻鵝泉」は『新唐書』地理志一、豊州、西受降城の条に「北三百里、有鶻鵝泉」と見える。西受降城については『元和郡県志』巻四、関内道の条から、景雲三年（七〇九）、突厥を打ち破った張仁愿によって黄河沿いに築かれた東、中を含めた三受降城のうちの一つであることが分かる。起句の「破訥沙」は、詩中の主人公が身を置いている位置を具体的に示している。承句の「鶻鵝泉」は「破訥沙」と単に対になっていないばかりでなく、主人公が実際にどこで戦闘してきたのかを明示する機能を果たしている。詩中の主人公の足跡が具体的に示され、且つ彼の視点が「破訥沙」一帯の風景に定められているという点において、本詩には特定の場所に設定された（辺塞空間）が構築されていると認められよう。このような機能を持つ地名が窺える李益の辺塞詩を次にいくつか例示する。

何地可潸然 何の地にか潸然たるべき

陽城烽樹辺 陽城烽樹の辺
（一軍次陽城烽舎北流泉）

心期紫閣山中月　心は期す　紫閣　山中の月
身過黃堆烽上雲　身は過る　黃堆　烽上の雲

(「上黃堆烽」)

「軍次陽城烽舍北流泉」では、主人公が一体どこで涙が流れるのかと自問し、それが他でもない「陽城」であると自答していることから分かるように、とりわけその嘆きの場が強調されて表現されている。「上黃堆烽」では、心中では「紫閣山」すなわち長安の南に位置する終南山を思いやる一方で、「三」「黃堆烽」を失意のまま過ぎて行かざるを得ない主人公の思いが語られている。このように「一度破訥沙」に限らず、李益の辺塞詩における地名は、詩中の主人公の視点を特定し、そこに描かれてる辺塞地域を具体的に示す機能を持つ。李益の辺塞詩において地名がこのように用いられていることは、一見すると当然のことと思われよう。しかし盛唐の辺塞詩と比較すると、このことは看過できない李益の辺塞詩の一表現になつていると考えられる。例えば李白「戰城南」の冒頭を見てみよう。

去年戰桑乾源　　去年は桑乾の源に戦い

今年戰葱河道　　今年は葱河の道に戦う

洗兵条支海上波　　兵を洗う　条支　海上の波

放馬天山雪中雲　　馬を放つ　天山　雪中の雲

去年は「桑乾」河の流れる河北の一带に従軍していた主人公が、今年パミール高原から流れ去る「葱河」に戦う、と言ふのだから、彼はこの地に身を置いていとひとまず考えられる。また、「条支」は『史記』卷百二十三、大宛伝に「条支在安息西数千里、臨西海」（条支は安息の西数千里に在り、西海に臨む）と見える。この地が現在のどこに位置しているの

かは諸説あってアラビアやイラクなどに比定されているが^{三三}、いずれにしても詩の主人公が「葱河」から、自身の武器を洗うことが不可能なところに移動していることは明らかである。「一条支」に対する「天山」は新疆ウイグル自治区の北部に位置し、東西に連なる山脈である。「一条支」と「天山」の位置もまた、作品の主人公が移動するにはあまりにも離れ過ぎている。これら四つの地名の位置関係を、辺塞地域に身を置く主人公の視点から解釈することに拘泥して矛盾なく関連づけようとすると、作品は一人の人物の実体験からは離れたものとなってしまう。これらの地名によって設定されている空間を矛盾なく解釈しようとするならば、「辺塞空間」がイメージの中において構成されていると考えざるを得ない。また、こうした地名の使用は河北での従軍経験を持つ高適「塞下曲」の「青海陣雲匝、黒山兵氣衝」（青海 陣雲匝あまらく、黒山 兵氣衝うきく）という一聯にも窺える^{三三}。このように李白「戰城南」や高適「塞下曲」には、地名の自由奔放な配置によって広大な（辺塞空間）が構築されているのである。またその空間の大きな広がりこそが、こうした詩の際立った特徴となっていることは明白なことであろう。もっともこれらは虚構、模擬を前提とする楽府題を用いて歌われた辺塞詩であるから、このように自由に地名が配置されていることは当然と言えるのかもしれない。しかし、顔真卿を送別する際に歌われた岑参「胡笳歌、送顔真卿赴河隴」に示されている地名についても、同様の指摘が可能である^{三四}。

涼州八月蕭関道 涼州八月 蕭関の道

北風吹断天山草 北風 吹断す 天山の草

崑崙山南月欲斜 崑崙 山南 月斜めならんと欲し

胡人向月吹胡笳 胡人 月に向かいて胡笳を吹く

顔真卿の向かう「河隴」とは河西節度使と隴右節度使の併称であり、それぞれ甘肅省武威県、青海省楽都県に置かれてい

た。詩中の「涼州」は武威に当る。しかし同一句内に見える「蕭關」は寧夏回族自治区の固源あたりに位置しており、河西回廊に連なる「涼州」を通過する関所ではない。「天山」は先に見た山脈であり、「涼州」からは遠い場所に位置している。「崑崙山」は新疆とチベットの間を東西に走り、青海省にもかかる山脈。「蕭關」「天山」「崑崙山」は、顔真卿がこれから向かう「涼州」とは、あまりにも離れて位置しているのは明らかであり、とすれば、これらの三つの地名も李白「戰城南」におけるものと同様の効果を持っていると認められよう。

以上に例示してきた地名の使用を見てくると、先に示した李益の辺塞詩はやや平板な印象を受けるかもしれない。しかし逆に言えば、地名が作品内の主人公の位置を明示しているからこそ、李益の辺塞詩はそうした詩とは異なる、より現実に密着した写実的とも言える（辺塞空間）が描かれていると認められるだろう。また、こうした地名の使用が李益の辺塞詩だけに窺える独自のものは断定できないにしても、盛唐詩人のような誇張された表現にはなっていないことは、やはり注意しておくべきと思われる。

2 常套的地名表現との比較

李益の辺塞詩には関内道の地名がひときわ多く用いられていたことについてはすでに触れたが、盛唐の辺塞詩においても関内道を指すものが全く見えなわけではなく、「朔方」「上郡」「雲中」などが頻繁に用いられており、例えば李白「北上行」の冒頭部分には次のように見える。

馬足蹶側石　馬足　側石つまずに蹶つまずき

車輪摧高岡 車輪 高岡に摧かる

沙塵接幽州 沙塵 幽州に接し

烽火連朔方 烽火 朔方に連なる

行軍の様子を馬と車に注目して描写した後、「幽州」「朔方」と戰場が広がる様子を描く。「幽州」は河北一帯、「朔方」は関内道北部一帯を指し、両者共に漢代の呼称である。先に引用した岑参「胡笳歌」にも見えていた西域の「天山」「涼州」や関内道の中西部に位置する「蕭關」なども同じく、漢代以来の地名であると同時に、従来の辺塞詩一般においても常套的に用いられている。とすれば、これらは恐らく当時の読者にとってなじみ深い地名であったろうし、またこうした常套的な地名を配置することで、読者に対し従来培われてきた辺塞地域への連想を円滑に喚起することが期待されたに違いない。このことは、恐らく辺塞詩一般に常套的な地名が繰り返し用いられてきている理由の一つとなっているだろう。

一方、李益の辺塞詩には「上郡」などといった関内道を示す常套的な地名が使用されている場合もあるが、全体的には先に挙げた「破訥沙」「黄堆」といった常套的とは言いがたい地名が目立つ。次に李益「暖川」を例とし、こうした地名が作品にどのような効果を与えているのかについて考えてみよう。

胡風凍合鷓鴣泉 胡風 凍りて合す鷓鴣泉

牧馬千群逐暖川 牧馬千群 暖川を逐う

塞外征行無尽日 塞外の征行 尽日無く

年年移帳雪中天 年年帳を移す 雪中の天

放牧された馬と行軍し続ける兵士との対比は、例えば李益とほぼ時代を同じくする常袞の詩にも「牧馬胡天晚、移軍磧路長」（馬を牧して胡天晩れ、軍を移して磧路長し）（二代員將軍罷戰後歸故里）と見え、やや図式的であると言えるのかもれない。しかし本詩においては冒頭の「鶻鶻泉」の地名の存在こそが、この詩に従来とはやや異質の印象を与えているように思われる。

起句の「鶻鶻泉」は先に西受降城の北に位置していたことを見た。この地は漢代の朔方郡に含まれる。また、「鶻鶻泉」は『新唐書』地理志以前の文献には見えず、「朔方」と比較すると新しく、且つ管見の限り李益以前の詩には用例が見えない地名である^(三三)。とすれば、「鶻鶻泉」を用いることからは、「朔方」などの常套的な地名が喚起するような効果を期待することは難しい。しかし反面、新しいからこそ従来には無い独特な（辺塞空間）を読み手に喚起する効果が期待できるだろう。一見、一般的な辺塞地域が描かれているようなこの詩は、冒頭に「鶻鶻泉」を提示することによって、常套的な地名が用いられている従来の辺塞詩とは異なる色彩を帯びさせることに成功していると言えよう。

李益の辺塞詩において「鶻鶻泉」と質を同じくする地名は少なくない。例えば、冒頭に触れた「夜上受降城聞笛」の「回楽」は、『元和郡県志』関内道四、靈州の条によると北周に置かれた県名で、唐がその呼称を引き継いだことが確かめられるし、先に例示した「破訥沙」についても、そこで触れておいたように『元和郡県志』に「普訥沙」として初めて見える地名のようである。また「黄堆」は陝西省大荔県にある山名であり、『新唐書』卷六、代宗紀、広徳元年（七六三）の条に「党項羌寇同州、郭子儀敗之于黄堆山党項羌」（同州を寇し、郭子儀之を黄堆山に敗る）と見えるところからすると、これは唐代以降呼称されるようになった地名である可能性が高い。加えてこれらの地名は、従来の辺塞詩においてははいずれも「天山」や「青海」などに比べて使用頻度が極めて低いものである。以下、個々の説明は注で述べるが「払雲堆」「石楼」「西城」「統漢」「六州」「五城」などの地名、地域名についても概ね同様の指摘ができる^(三三)。

無論、李益の辺塞詩に見える全ての地名が、読者に辺塞地域のイメージを新しく喚起させる機能を持ち得ているわけではない。「桑乾」「燕州」といった河北の地名は従来の辺塞詩に多用されているだけに、「天山」「涼州」などと同様の効果を持つていると認められるし、また「朔方」「上郡」といった関内道を示す常套的な地名も実際に用いられている。李益が時に従来の辺塞詩と同じように、常套的な地名を用いていたことは事実であり、同時にこのことは彼の辺塞詩が盛唐の詩風を継承していることを示すものでもあろう。しかし全体的に見ると、こうした例は少数に止まっており、むしろこれまで見てきたように、作品に描かれている〈辺塞空間〉がある地域に特定され、従来の辺塞詩とは異なる色彩を帯びたものが多くを占めていることは、盛唐の辺塞詩とはまた異なった特色を示しているという点で、看過することはできないのである。

もう一つ李益の辺塞詩における地名の機能として注意しておきたいことがある。李益の辺塞詩に見える地名の中には唐代以降用いられたと考えられるものがいくつかあった。そうした地名が用いられている李益の辺塞詩には、彼の生きた唐代を直接示す〈辺塞空間〉が構築されている、と考えられることである。次にこのことについて、節を改めて検証してみようと思う。

(二) 同時代性を示す表現

間接的或いは直接的にせよ、作者の生きる時代が作品中に具体的に示されていることは、辺塞詩においてはかなり特殊なことと思われる。唐代の辺塞詩、とりわけ楽府題によるそれは、唐のことを漢と称するばかりでなく、地名や官名なども漢代のものを用いる傾向がある。ここではその一例として王昌齡「出塞」(其一)を見よう。

秦時明月漢時關 秦時の明月 漢時の関

万里長征人未還 万里 長征 人未だ還らず

但使龍城飛將在 但だ 龍城の飛將をして在らしめば

不教胡馬度陰山 胡馬をして陰山を度らしめじ

「龍城」は漢の衛青が匈奴を破ったことを想起させる地名であり、「陰山」は漢と匈奴の境界となっていた山脈である。また「飛將」は飛將軍と称された漢の李広を指す。ここには特に唐のことがらを示す語句が見えないけれども、作者王昌齡の生きた唐代の辺塞地域が歌われていると考えることは、ごく自然なこととして受け容れられよう。また、作者が唐代の詩人ということを意識するからこそ、読者は「漢」ということばに時代を越えた「唐」を重ね合わせ、小川環樹氏が述べているように「歴史と現実の微妙に交錯した」豊かなイメージをこの詩から感受しうるのだと思われる^{三〇}。そして何よりもこのことが人々に詩的感動を与える要因になっていることは、疑問の余地がないであろう。

また一方、作者自身の生きる時代を特に示す語句が見えないものがある。王翰「涼州詞」を例に引く。

葡萄酒美酒夜光杯 葡萄酒の美酒 夜光の杯

欲飲琵琶馬上催 飲まんと欲すれば 琵琶馬上に催す^{三一}

醉臥沙場君莫笑 酔いて沙場に臥すとも 君笑うこと莫れ

古來征戰幾人回 古來 征戰 幾人か回らん

ここには「葡萄酒」「夜光杯」といった西域特有の産物が配置され、いつ戦死するとも知れない兵士の悲壯感が歌い上げら

れているが、特定の時代を示すような語句は一切用いられておらず、読者が任意にこの詩の時代を設定できるようになっている。

このように唐代の辺塞詩の多くは、漢代になぞらえて同時代のことをうたうか、或いは時代を全く示さずに詠じるのが一般的であり、作者の生きた時代を直接示す表現を取らないのが普通である。従来の辺塞詩における時代の表現に着目すると、李益の辺塞詩における地名の多くが同時代を示す語として機能していることが改めて認められよう。そして、このことはまた単に地名の表現からのみ言えることではないのである。

それが最も際立っている「従軍夜次六胡北飲馬磨劍石為祝傷辭」（以下「祝傷辭」と略称）を例として検証していく。「祝傷辭」は『楚辭』「國殤」を意識して戦死者を哀悼したものである（数字は句数を示し、『李益集注』に従い句を分けた）。

1 我行空磧

我 空磧を行きしとき

2 見沙之磷磷與草之霏霏

沙の磷磷たると草の霏霏たると

3 半没胡兒磨劍石

半ば没したる胡兒の磨劍石とを見る

4 當時洗劍血成川

當時劍を洗えば 血は川を成し

5 至今草與沙皆赤

今に至るも草と沙とは皆赤し

詩は、軍旅の途中、本詩の主人公である「我」が砂漠に埋もれた「磨劍石」を発見することによって始まる。主人公が「當時」「至今」と述べ、時代の推移を意識していることに注意しておきたい。この後には主人公と「磨劍石」に取り憑く「殤」、すなわち兵士の怨霊との問答が記されている。怨霊は、舜帝崩御の後、湘夫人が悲痛のあまり湘水に身を投げたことに仮託し、自身の悲しみや怨みの根深さを主人公に訴えかける。以下、主人公によって、過去から「今」に至るまで戦争が止むこ

となく続いていくことが語られていく。

15 秦亡漢絶三十国 秦亡び 漢絶ゆ 三十国

16 関山戦死知何極 関山 戦死 何ぞ極まるを知らん

17 風飄雨灑水自流 風飄ひるがえり 雨灑あそぎて 水自ら流れ

18 此中有冤消不得 此の中 冤あやみ有りて消さんとするも得ず

十五句目に秦、漢王朝の滅亡が歌われているように、主人公の言う「当時」が古くは秦代を指していることが、この部分で具体的に明らかにされている。ただ、漢王朝が滅亡してからの「三十国」は具体性に欠けた表現なので、このことから主人公の言う「今」を規定することはできない。しかし主人公の言う「今」が提示されないまま作品が終結してしまうわけではなく、末尾においてそのことが明示される。

29 聖君破胡為六州 聖君 胡を破りて六州と為すも

30 六州又尽為胡丘 六州も又 尽きて胡丘と為る

31 韓公三城断胡路 韓公 三城 胡路を断ち

32 漢甲百万屯边秋 漢甲 百万 边秋に屯す

33 乃分司空授朔土 乃ち司空に分かちて朔土を授け

34 擁以玉節臨諸侯 擁もるに玉節を以てして諸侯に臨む

35 漢為一雪万世讐 漢 為に一たび万世の讐を雪ぐ

36 我今抽刀勒劍石 我は今 刀を抽きて劍石に勒す

37 告爾万世為唐休 爾に告ぐ 万世 唐の為に休んぜよ

三十二句目、及び三十五句目に「漢」と見えているが、前段に「秦亡漢絶」と見えていたことから、滅亡した漢王朝を示すものではないことは明らかである。とすれば、この「漢」は、胡人が漢族を「漢人」「漢児」などと呼んでいたことを意識した呼称と考えられる。三十七句目の「唐」についても、堯帝が封ぜられた太原にあつたという国名を指すのではなく、主人公が帰属する王朝名として用いられていることは明らかである。とすると、冒頭に主人公が述べていた「今」が直接唐代を指していることは言うまでもないことであろう。同時に、一見漢代に仮託してうたっているかのような三十一、三十二句目についても、先に触れたように、韓国公に封ぜられた初唐の將軍、張仁愿が六州北部に三受降城を築いた史実に基づいていると認められよう。「祝殤辞」にはこのように唐代のことがらが明示されている。

作品の時代が唐に設定されていると考えられる例は、樂府題を用いた李益の邊塞詩にも見られ、次に挙げる「塞下曲」は、同時代の史実が読み込まれているという点で「祝殤辞」と軌を一にしている。

伏波惟願裏尸還 伏波は惟だ願う 尸を裏みて還るを

定遠何須生入関 定遠は何ぞ須たん 生きて関に入るを

莫遣隻輪帰海窟 隻輪をして海窟に帰せしむること莫からん

仍留一箭射天山 仍^{なほ} 一箭を留めて天山に射ん

「伏波」は伏波將軍馬援を、「定遠」は定遠侯班超を指すがいずれも後漢の名将である。「隻輪」は片方の車輪。「公羊伝」

僖公三十三年の条には晋人と姜戎が連合して秦軍を大いに破ったさまが「匹馬隻輪、無反者」（匹馬隻輪 反る者無し）と表現されている。転句はこのことを踏まえて、敵を打ち破ろうとする兵士の心意気を歌ったものである。転句までは作品の時代が漢代に設定されているようであり、楽府一般の常套表現と軌を一にしているが、しかし結句は楽府の通例からはみ出したものとなっている。『旧唐書』卷八十三、薛仁貴伝には、彼が天山において三矢で三人の突厥を射止め、恐れをなした相手が全員降伏したという武勇伝が見えており、その時にうたわれた軍歌が「將軍三箭定天山、戰士長歌入漢関」（將軍は三箭もて天山を定め、戰士は長歌して漢関に入る）と記されている。「三箭」と「一箭」という違いはあるにせよ、結句はこの軍歌を下敷きにしてに相違ない。李益「塞下曲」は漢代のことになぞらえているようであるが、唐代の出来事を典故として用いているが故に楽府一般とは異なる趣を具えているのである。楽府題を用いた李益の辺塞詩は多くはないが、この他にも「來從寶車騎行」などいくつかあって、それらは王昌齡「出塞」などと同様、漢代に仮託し唐代のことをうたうという表現が一貫して用いられている。李益が楽府題による辺塞詩を創作する際には、普通従来の規範に則っていたようであるが、本詩はそうした枠には収まりきれない例として注目に値するだろう。

また、同時代の史実が読み込まれていることによって作品の時代が特定されている例として、「五城道中」を挙げることができる。この詩には次のような伝聞表現が見える。

仍聞旧兵老 仍ち聞く 旧兵の老いて

尚在烏蘭戍 尚 烏蘭の戍りに在るを

「烏蘭」は会州、会寧郡の西南にあった関所並びに県名。甘肅省靖遠県の西南に位置していた。『元和郡県志』卷四、関内道、会州の条によると、北周期に烏蘭関が置かれ唐が引き継いだことが分かる。『資治通鑑』卷二百三十五、貞元十六年

(八〇〇)の条には唐軍が吐蕃を烏蘭橋で破ったとあり、また卷二百三十九、元和八年(八一三)の条には吐蕃が、時の朔方節度使であった王侁に賄賂を与えて烏蘭橋を作ったと見えることから、この地域は唐代において双方にとって非常に重要な軍事拠点であったと言える。従ってこの一聯もまた、作品に設定されている時代が他ならぬ作者の生きた唐代であるということを明示する機能を果たしていると認められるのである。

(三) 報道文学としての辺塞詩

楽府題を用いない李益の辺塞詩の中には、「赴渭北宿石泉駅、南望黃堆烽」のように一貫して漢代に仮託して歌われているものもあるし、常套的な地名を用いる作品も確かにある。しかし、前節で示した例を見てくると、李益の辺塞詩は彼自身の生きた時代、更には言えば彼自身の従軍体験と密接に関わるものが主流となっておりと考えてよいだろう。これまで見てきた李益の辺塞詩の全てが、その従軍体験と直結しているとは言えないまでも、作品の時代、場所が明示されている具体的な描写を考慮すると、李益は報道的なまなざしをもって辺塞地域を詩に描こうとしていたように思われる。

報道的な視点から辺塞を描いた従来の典型的な詩人としては、岑参の名を挙げることができるだろう。鈴木修次氏は『唐詩 その伝達の場』「報道の詩」において、

岑参の歌行体の形をとるこれらの送別詩は、送別詩であるよりはむしろ西域の風物をうたうことが主で、それは西域のことを報道する新しい情報文芸であった。

と、岑参の辺塞を歌った作品に対して報道文芸という新しい評価を加えている³⁴。氏が言うように岑参には「熱海行、送

崔侍御還京「火山雲歌、送別」といった、従来は見えない西域の地名を用いた詩などがあり、作者の生きた西域の辺塞が歌われているという点で、確かにそれらは報道文学と呼ぶのに相応しい。これまで見てきた李益の一連の辺塞詩についても、このような報道文学の系譜に連なるものと考えられ、同時にこうした点からも盛唐文学を継承、発展させている側面を看取することができるだろう。

ただ、その報道表現の仕方には、両者にやや違いがあるように思われる。鈴木氏は同書で岑参「熱海行」の冒頭からの十二句に対し、「蒸沙燂石然虜雲、沸浪炎海煎漢月」（沙を蒸し石を燂き虜雲を然やし、浪を沸かし海を炎き漢月を煎る）といった表現を踏まえつつ「幻想をうたう」と総括する^{三三〇}。また「白雪歌、送武判官歸京」に対しては「美文による報道文学であろう」とすると同時に、イメージの世界において視覚的幻影を結ばせようとする斬新なくふうを見ることができると述べている^{三三二}。岑参のこうした誇張表現は、前節に引いた「胡笳歌」で指摘しておいたように、地名の表現にも共通していよう。一方、李益の場合、「祝殤辞」には確かに怨霊が登場しているという点で幻想的とも言えようが、主に辺塞地域自体が誇張されている岑参の辺塞詩とは方向を異にしていると思われる。李益の辺塞詩にあつては、これまで検証してきた例が示しているように幻想的とはいえない、戦場を見つめて歌ったものが主流をなしていた。報道文学という視点から李益の辺塞詩を見ても、盛唐の辺塞詩とは異質の部分が看取できるだろう。

まとめ

以上、場所及び時代という主に二つの側面から李益の辺塞詩を検証してきた。李益の辺塞詩には、盛唐の詩風を継承する一面も窺えたが、場所や時代が特定され作品の輪郭が明確となっているものからは、盛唐の辺塞詩一般とは異なる側面を見

ることができた。ここで、李益の辺塞詩の多くが、盛唐の辺塞詩とは異なる具体性を帯びている理由について改めて考えてみると、自身の実体験を作品自体に直結させようとする彼の意志と無関係ではないように思われる。仮に作品世界と実体験とを直結させようとする李益の意志が稀薄だったとすれば、案府題を用いた作品が更に多くを占めていたとしても不思議ではないだろうし、あくまでも自己の体験を作品世界に投影しようという執着が無ければ、具体性個性性を帯びた李益の辺塞詩は存在しえなかったと考えられるからである。また、読者の側からしてみると作中に設定されている場所や時代が直接示されている李益の辺塞詩からは、岑参「胡笳歌」のような、広大な辺塞地域のひろがりや、王昌齡「出塞」のような現実と歴史が微妙に交錯した詩的印象を感受することは少ないかもしれない。しかし、そこに構築された（辺塞空間）がある場所に特定され、唐という時代に直結しているという点において、王昌齡の詩などとは異なる現実味を帯びた辺塞のイメージを感受することができるだろう。

また、明の許学夷は李益と盛唐の辺塞詩との相違について、彼の辺塞詩を賞讃した後につけて興味深い発言をしている。

李益、權徳輿在大歴之後。而其詩氣格有類盛唐者、乃是其氣質不同、非有意復古也。

李益、權徳輿は大歴（大歴）の後に在り。而れども其の詩の氣格は盛唐に類する者有るも、乃ち是れ其の氣質は同じからず、復古（復古）を意（意）うこと有ること非ざるなり。

（『詩源辯体』卷二十二）

李益の詩の風格は盛唐詩に類似しているが、その性質は異なっているという許学夷の発言は、彼の文学の本質を考える上で極めて示唆に富んでいると思われる。許学夷の言う「復古」とは、断定はできないが、恐らく李白「古風」（其一）に提起されているような、復古精神が念頭におかれたものであるろう。加藤敏氏は、李白が「古風」で『詩経』以来の風雅の精

神を体した文学」への回帰を提唱しており、「戰場南」「関山月」などの楽府がその実践である、と指摘している^{三〇}。こうした楽府作品が盛唐文人の考えていた復古の実践の全てとまでは言えないとしても、漢代の文学を模擬することで彼らがそうした精神を継承しようとしていたことは疑問の余地がないだろう。これまで見てきた李益の辺塞詩が、漢代に仮託して歌ったものよりも、むしろ唐代のことを直叙した作品が主流を成していたことを踏まえると、許学夷の発言はこうした特色を繊細に感受したことによっているのかもしれない。

漢代になぞらえて大胆に辺塞地域を歌うことも、或いは自身の実体験に則しつつそれを歌おうとすることも共に文学精神の一表現である。李益は主に後者の立場を取って多くの人々に詩的感動を与えてきた詩人であると言えるだろうし、同時にこうした作風にこそ、盛唐の辺塞詩とは一線を画する、彼の独自性を認めることができるだろう。また一步踏み込んで言えば、このような李益の辺塞詩の特色に対して、中唐詩人としての彼の側面を見出すこともできないのではないだろうか。

近年の研究では、従来の定型化された表現を打開し、展開していくことが、中唐文学の大きな特徴となつていることが指摘されている^{三一}。李益の辺塞詩には明人が述べていたように盛唐の詩風を継承している部分も確かに窺える。とは言え、新しい地名を頻繁に用い、同時代のことながら詠じた李益の辺塞詩に限って言えば、常套的地名を頻繁に用いている、定型化された従来の辺塞詩の枠からは外れていると認められるだろうし、またこうした点から、新たな辺塞詩の表現の可能性を切り開いた詩人として李益を捉えることができるだろう。小論は辺塞詩という限られた範囲の中で、李益の文学についての考察を進めたものであるが、以上に見てきたことから中唐詩人に共通する特色の一端を見ることができたと思う。

(一) 『全唐詩』(康熙四十四年(一七〇五)刊、本稿で使用したのは中華書局排印本、一九六〇)所収「李益集」は「外」を「下」に作っている。なお、現在見ることのできる主な李益詩集の版本は、『全唐詩』以外に、席啓寓輯『唐詩百名家全集』(康熙四十一年(一七〇二)刊)所収の「李君虞詩集」(以下席本と略称)、張澍輯『二酉堂叢書』(道光元年(一八二一)刊)所収の「李尚書詩集」(以下張本と略称)がある。張本は席本に基づきながら、その遺漏を『全唐詩』「李益集」から補っている。李益詩集の版本については「李益詩集流伝情況考」(王亦軍、裴豫敏編注『李益集注』甘肅人民出版社、一九八九)に詳しい。両氏はここで『全唐詩』「李益集」と席本はもともと系統を異にし、後者が李益の詩を網羅的に収録していると指摘している。そこで本稿では李益の詩を引用するに当り『全唐詩』「李益集」を底本とした。李益詩集の注釈書は『李益集注』以外に、范之麟注『李益詩注』(上海古籍出版社、一九八四)がある。また郝潤華輯校『李益詩歌集評』(甘肅人民出版社、一九九七)は『全唐詩』「李益集」と席本、張本及び『秦府詩集』などの選集に載る李益詩などと校合した「校」を付している。

(二) 『旧唐書』卷百三十七、李益伝は「毎作一篇、為教坊楽人以賂求取、唱為供奉歌詞」と記しており、このことから李益の詩が当時の人々に愛好されていたことが窺える。

(三) 「辺塞詩」の概念は各研究者によって一様ではなく定義することが難しい。佐藤保「辺塞詩概観―唐代の辺塞詩を中心に―」(『唐代の辺塞詩』尚学図書、一九七九)は、「辺塞詩」を「辺境のとりでないしは塞外の風物を不可欠の題材とし、且つ「辺境での戦役に従事する将兵の心情を描写」したものと定義する。また「戦城南」「塞下曲」などといった秦府題を用いた作品も「辺塞詩」の範疇に組み入れている。氏の「辺塞詩」の定義はやや広範囲に互るものであり、これが絶対的なものとは言えないが、こうした見方もひとまずは許容されるであろう。以下、小論も便宜的に氏の定義に従い、秦府題による作品なども含めて「辺塞詩」と呼ぶことにする。

(四) 『劉禹錫集箋証』(上海古籍出版社、一九八九)。この詩は劉禹錫が書て交流のあった人物を回想したものである。引用句の下には「李尚書」という注記が見えるものがある。李益が劉禹錫と交流があったことは、禹錫「揚州春夜李端公益……」という詩題から確かめられ、また李益が晩年礼部尚書であったことからすると、引用句は劉禹錫が李益を回想したものであると考えてほぼ間違いないだろう。

(五) 李益「從軍詩序」の末尾には「時左補闕盧景亮見知于文者、令予輯錄遂成五十首贈之」と見える。晁公武が『郡齋讀書志』「李益詩」の条で、「今集有從軍詩五十首」と述べているところからすると、宋代には李益自身が「輯録」したという、いわゆる「從軍詩集」が現存していたことが分かるが、今は散逸している。張本や王夢鷗『唐詩人李益和他的作品』(台灣芸文印書館、一九七三)では「從軍詩集」の再構築が試みられているが推定の域を出ておらず、現存する五十首あまりの李益の邊塞詩の全てがこの詩集に収録されていたか否かは不明である。

(六) 鍾嶸『詩品』「序」に「自王、楊、枚、馬之徒、詞賦競爽、而吟詠靡聞」と見え、曹旭氏は「競爽」に「爭勝比美」と注をしている(『詩品集注』上海古籍出版社、一九九四)。胡應麟のいう「競爽」についても、優れた表現を競うといったほどの意味と考えてよいだろう。

(七) 例えば、明の王世貞『芸苑卮言』巻四の「回棗峰一章、何必王龍標、李供奉」の語や、清の毛先舒『詩辨』巻三の「至從軍北征使不減盛唐高手」の語なども、李益の邊塞詩が盛唐のそれに勝るとも劣らないということを主張していると考えられる。

(八) 「李尚書詩集」については注一参照。

(九) 「爽颯之氣」は生き生きとした気風を意味しよう。これは注四に触れた胡應麟の「競爽」を意識しているかもしれない。

(一〇) 李益「夜上西城、聽梁州曲」の「鴻雁新從北地來、聞声一半卻飛回」、及び「野田行」の「寒孤嘯青冢、鬼火燒白楊」を意識しての発言であろう。

(一一) 譚優学「李益行年考」(『唐詩人行年考』四川人民出版社、一九八一)は、この「序」が張本にしか見えないばかりでなく、それ

が出典を示していないことなどを根拠として李益の作ではないと述べている。一方、馬仁可「李益（從軍詩序）考実」（『社会科学』（甘肅）五期、一九八三）は、張本よりも古い席本にこの「序」が見え、且つこの版本が明刊仿宋本をもとにしていたことなどを指摘した上で譚氏に反駁しており、関眉「李益從軍經歷考辨」（『文献』二二期、一九八四）もまた、馬氏とほぼ同様の結論を得ている。本論も馬、関両氏の指摘に従い、この「序」を李益の作と見なし論を進めていく。

- (二二) 例えば、卞孝萱、喬長阜両氏は「這些詩從多方面真實而形象地反映了當時邊塞戰爭等的實際」（「李益」『中国歷代著名文學者評伝』山東教育出版社、一九八三）と述べている。また、増田清秀氏が「李益は、冷静に現實を凝視しながら、平淡に写し出し、あくまでも體驗を重んじた」（「唐人の秦府親と中唐詩人の秦府」『秦府の歴史的研究』三八三頁、創文社、一九七五）と言い、佐藤保氏が「李益や戎昱の作品にはそれぞれ実體驗にもとづく激しさがある（前掲「辺塞詩概観」）と述べているように、日本の先行研究もこのような見方をしている。

- (二三) 李益の閱歷に関する先行研究は、容肇祖「唐詩人李益的生平」（『嶺南學報』第二卷第一期、一九三一）を筆頭に、卞孝萱「李益年譜稿」（『中華文史論叢』八輯、一九七八）、注一一で触れた譚優学「李益行年考」、及び注一で触れた『李益集注』中の「李益祖籍及出生地考」などがある。

- (二四) 『新唐書』李益伝は「同輩行稍進頭、益独不調、鬱鬱去。游燕、劉濟辟置幕府、進為營田副使」と記すに留まっております。従軍したことにについては省略されている。また、『旧唐書』の引用箇所の前には「少有癡病、而多猜忌、防閑妻妾、過為苛酷、而有散灰扇戸之譚聞於時、故時謂妬癡為李益疾、以是久之不調、而流輩皆居頭位」と、李益が猜疑心の強い人物であったことが記されており、昇進できなかつた理由が明らかにされている。

- (二五) 『唐詩紀事』卷三十、李益の条「大曆四年、登第」による。

- (二六) 『唐会要』卷七十六、制科挙の条「諷諫主文科、鄭珣瑜、李益及第」による。

(二七) 『郡齋讀書志』卷十七「李益集」の下に記されている「大曆四年、進士、調鄭果尉」と、『金石萃編』卷八十、華岳題名下の「前鄭果主簿李益」による。

(二八) 渡辺孝「中晚唐における官人の幕職官入仕とその背景」(『中唐文学の視角』創文社、一九九九)などを参照した。

(二九) 『旧唐書』卷三十八、地理志一及び『元和郡県志』卷四、關内道の記述による。

(三〇) 詩中の主人公が作者自身と限らないことは、虚構を前提とした案府題による辺塞詩を想起すると理解し易いだろう。作者と詩中の主人公が一致しているか否かを判断することは困難な問題であるから、本稿ではひとまず主人公と記すこととする。また、作品に描かれている辺塞を、今仮に(「辺塞空間」と呼ぶ。

(三一) 「紫閣」は唐代以前の地理書などには見えないようだが、李白に「望終南山紫閣隱者」といった詩題が見え、また『太平広記』卷四十一に引く「薛尊師」の出典である『原化記』に「終南山紫閣峯下、去長安七十里」とあることから、これは終南山を指していると考えて誤りはないだろう。

(三二) 清の徐繼畲『瀛環志略』卷三十ではアラビアに、また清の洪鈞『元史訳文証補』卷二十七中、条支の条ではチグリス、ユーフラテスの間、今のイラク領内に比定されている。

(三三) 「青海」は青海省に、対する「黒山」は遼寧省西南部に位置している。

(三四) 岑参「胡笳歌」については、中野美代子「岑参の辺塞詩」(『日本中国学会報』第一二集、一九六〇)に詳しい考証がある。

(三五) 後の例としては、劉言史「賦蕃子牧馬」などが挙げられるが、教例に止まっている。

(三六) 以下、地名の所在とそれが用いられている李益の詩題を並記していく。「弘雲堆」は『元和郡県志』卷四、關内道の条によると東受降城の置かれた丘名で、内蒙古自治区フフホト市から南西七〇キロほどに位置し、「弘雲堆」詩に見える。「石樓」は『太平寰宇記』卷三十六、靈州の条に「石樓山、山形似樓、因以樓名」とあり、靈州の領内にあったことが分かる。「石樓山見月」詩に見える。

「西城」は、『元和郡県志』巻四、関内道の条に西受降城の略称として「西城：韓公張仁愿置」と見えていることからこれもまた同様に解釈することができるだろう。「夜上西城、聽梁州曲二首」(其一)詩にある。「統漢」は正史の地志や地理書などに見えない地名であってその所在は定かでない。『李益集注』は同句に見える「降戸」を六州のいずれかに居住した突厥の呼称とみなしており、その根拠として『旧唐書』巻百九十四上、突厥伝の「咸亨中、突厥諸部落來降附者、多処之豐、勝、董、夏、朔、代等六州、謂之降戸」という記述を挙げている。このように「降戸」の位置を確定し、「統漢」が六州内にあつたと推定した上で、この地を夏州の通漢鎮に比定する。また「六州」は、突厥伝に示されているこれらの地域一帯を指しているだろう。「統漢」は「統漢烽下」詩に、「六州」は「登夏州城觀送行人賦得六州胡兒歌」などに見える。「五城」は、『資治通鑑』巻二百二十五、唐紀四十一の条に見える胡三省注によると、涇州、朔方節度使の所轄する豊安、定遠、新昌、豐寧、保寧と考えられる。この語は「五城道中」詩に見える。

(二七) 『唐詩概説』「唐詩の開花」二二三頁(岩波書店、一九五八)。

(二八) 一八三頁(日本放送出版協会、一九七六)。

(二九) 同書、一八八頁。

(三〇) 同書、一九三頁。

(三一) 『中国の文学論』(陳子昂から李白・杜甫・元結へ 詩風の革新)一二六頁(汲古書院、一九八七)。

(三二) 赤井益久「大曆から元和へ」(前掲『中唐文学の視角』)、川合康三「唐代文学」(『終南山の変容』研文出版、一九九九)などを参照した。